

# 風化させてはならない

～ 35年前の透析の実態 ～

## はじめに

富山県腎友会は今年で35周年になります。近年は患者の高齢化が進み、患者会への無理解者が増えて、ある時には100%近かった組織率が70%を割る大変残念な状態となってきました。

これ以上の低下は組織運営上からもいろいろ問題が出てくることになります。そこで腎友会設立当時、透析患者がどんな状態の中で、どんな気持ちで『人工腎臓友の会』を設立したのかを会員及び未加入の方たちに知ってもらい、患者会の必要性を訴え、会員数を増やしていかなければならないと考えています。

昭和45年5月23日、初めて富山での透析が富山赤十字病院で行われたのですが、当時を知る方々が徐々に少なくなっている中で嬉しいことに、その日その時に最初の患者であった宮島正司さん(現、横田病院腎友会)、Drの林省一郎先生(現、元町内科医院院長)、そして透析室看護婦長だった藤村和子さんが、今もお元気でお過ごしでいらっしゃいます。そして会報等から当時に関する記録を調べたところ、林先生の第30回定期総会における記念講演記録や、30周年記念誌に載った宮島さんへのインタビュー記事、富山赤十字病院の11番目の透析患者で新潟県能町から富山へ通院されていた太田正雄さん(富山県腎友会の設立に関わり、10年間事務局長を務めるなど富山県腎友会のために大変力を尽くされました。)が、平成5年の定期総会に来て講演していただいたときの記録などが残っていました。太田さんは新潟県に帰ってからも長らく活躍されていました。

これらの記録を読み返し、また藤村婦長さんをご自宅に訪問して、当時のお話を聞かせていただくなどして、この拙文を書き始めました。

ずいぶん前置きが長くなりましたが、腎友会創立時に懸命に生きようとした人々の心を受け継いで、これからも透析患者である私たちが質の高い透析生活を送り、質の良い透析医療を受け続けることができるために、腎友会活動を皆で盛り上げ、組織力の強化を計ろうではありませんか。

## たくさんの方の死

昭和41年ごろにアメリカのミルトンロイ社の機械が日本に入り、名古屋の中京病院で最初の透析が開始、全国数か所の大学病院でも導入され、新潟大学で勤務されていた林先生も透析に携わることになりました。

昭和43年頃になると患者が増えてきて日本透析医学会の前身に当たる人工透析研究会が発足。しかし透析の効果は顕著であったけれどまだまだ機械は少なく、金沢大学でも2台しかなく、60人が待っている状態だったそうです。

2台の恩恵にあずかれない人達は腹膜灌流といって、今のCAPDとは違い、1回ごとに腹膜穿刺をし、1晩2日かけて腹膜に生食を入れては出し、入れては出しを繰り返す方法です。勿論その間寝たきりでとてもつらいものでした。

そしてやっと終わったと思ったら3～4日ほどたつとまたしなければならぬ、尿毒症といわれていた腎不全患者は助かる見込みもなく、腹膜灌流で命を繋いでいるしかありませんでした、中には60回もした人がいたそうですが結局みんなほとんど亡くなって

いきました。

いったい何人の人が尿毒症で亡くなっているのか、藤村婦長さんは富山市役所へ調べに行ったそうです。何と1年に100人以上の人が亡くなっていました。赤十字病院でも透析を考えていないのか、透析ができればたくさんの命が救われるのに、と何回も思ったそうです。しかし看護部長さんに相談すると、「透析をするなど大変なことなのよ。」と返事はいつも同じでした。

ところがそうした中で、ある日院長先生が、「日赤は本年度の計画の中で、透析導入を一番の仕事として計画している。新潟大学に専門医を依頼しているところだ。」と話されたのを聞いた時、婦長さんは、ビックリして涙が出そうになったそうです。

そして45年4月、専門医(林先生)が赴任されて急に忙しくなりました。病室をつぶして透析室に改築する仕事や中庭には井戸掘りが始まり、Drを中心にスタッフも透析について勉強会が始まりました。愛知の中京病院へ見学実習に行くなど目が回るほどでした。中京病院では、30名の透析患者が元気に通院しており、自分のキール型の透析器のメンブレン張りを手伝っていたのが強く心に残ったそうです。

## 透析始まる

このようにしてようやく富山県で初めての透析が始まったのです。昭和45年5月23日のことでした。8台のスタンダードキールというダイアライザーと、ベッドに横になった最初の透析患者である宮島さんと、血圧測定中の藤村婦長さんの写った写真と記事がその日の北日本新聞にしっかりと載りました。その見出しには『1年に100人も助かる』と書かれていました。テレビや新聞夕刊が取り上げ世間の注目を集めました。

現在ではクレアチニン値が8.0 mg/dlになると透析を勧められ、たいした苦しみも無いまま透析に入れますが、その頃は失明したり心不全や肺に水が溜まっていたり息も切れ切りの状態で透析に入ったので、不均衡症候群で吐くことが多く、初めは苦しい思いをしました。何回かするうちに歩けるようになり吐き気も治まってきて、透析の有難さ、生きることの喜びを身にしみて感じるようになるようになりました。

しかし、当時のキール型の機械は96.3×34 cmの長方形をした厚さ2.2 cmのポリプロピレン板を3枚使い、真ん中の板には上下両面に洗濯板状の150本の細かい溝が刻まれ、上下の板には片面に同じく溝が刻まれています。3枚の板の間に水に浸しておいたキュプロファン膜(セロファン)をサンドイッチ状に張り、レンチで固定します。溝の側に透析液を流し、膜を張った間を血液が流れる、という仕組みでした。

効率が悪く透析時間は8から10時間、感染はよくする、破れることも非常に多い、破れると血液が漏れるので急遽膜を張り直す、破れていなければホルマリンで消毒して毎日使う、「野戦病院並みのことをやっていたなあ。しかし、死ぬしかなかった慢性腎不全に治療効果があることが明らかに分かったから一生懸命だった。」と林先生は当時を振り返って話をされました。

またシャントは今のようない内シャントではなく外シャントといってシリコン樹脂の血管代用品が腕の血管につながれて外に出ており、透析のたびに中間のコネクターを外して



ダイアライザーにつなぐものでした。ところが感染や凝固しやすく存続が難しくてしょっちゅう手術が必要です。林先生が「昼夜の別なく除夜の鐘を聞きながら手術したこともあった」と笑っておっしゃったこともありました。

### 高額な医療費

そんな中でさらに大問題だったのが医療費、血液、透析食の3つでした。中でも何よりもまず透析医療費が高額であったこと、健康保険の本人はお金のことは考えずに治療できたのですが、家族の場合は3割負担があったのです。国民健康保険本人も同じく3割負担です。

太田さんの場合、お寺の住職で高校の先生もしていたけれど病気になって非常勤にしてもらったので3割負担、富山まで通うお金も3~4万はかかる、とても生活ができない。苦しんだ末保護を受けてやっと生きていた時期があったということです。

ある富山市の主婦の方で月にどうしても30万以上払わなければならない。また当時痛みが出るとケプリンという抗生物質を使った、これを打つと体が非常によくなるが1本1万円なので、合わせると医療費はどうしても40万円を超えてしまう。3割負担だと月に13万円取られるわけです。当時48歳のご主人の給料は12万8千円。給料が全部透析に消える、本当に悩んで、「私がいなければこんなことにならないのに。どうしたらいいか。」と、太田さんに3度ほど相談されたそうです。4~5か月ならこの家庭でも支払えるが一生となると大変です。太田さんも身にしみて分かる。ボーナスも凍結されご主人の給料も残らないということで、どうしたらいいのか太田さんにもどうにもなりません。

これでは医療費というものを考えなければ透析患者は生きていけない、国の政策を良くしないと、透析という治療法も役に立たず、それで助かるはずの患者も助からない、何とかなくてはと、県会議員や代議士に働きかけようと何人かで相談していたらその矢先、この奥さんが5階から飛び降りて亡くなってしまったのです。

医療費が原因で2年間に自殺した人が10人以上あったと太田さんは言っておられます。夜中に外シャントを抜き、命を絶った人もあり、田畑を手放したり家を売ったりなどして医療費を支払った人も多かったそうです。

主婦が飛び降り自殺した次の日、県の厚生部長で内科の医師でもあった佐々木先生がマスコミの報道で知り、「どうして死んだんだ。」と赤十字病院に調べに来られました。太田さんたちは、これは結局医療費の問題であることを佐々木厚生部長に訴えました。その後北日本テレビに出る機会を得て、渡辺さん(人工腎臓友の会初代会長)が出演、15分間、医療費の問題を佐々木厚生部長に再び一生懸命訴えたのです。この患者さんの死がなかったら富山県の医療問題でまだ2~3年は苦しんでいただろう、そういう意味ではあの方は皆の犠牲になってくれた人なんだ、と太田さんは今も考えているそうです。



富山県民生部長に説明する高島会長

## 『人工腎臓友の会』立ち上げ

しかしこれで医療費の問題が解決したわけではありません。同45年の12月「中京病院に患者の会ができたよ。あなた方も作って医療費の公費負担など訴えてはどうですか。」と林先生から助言を受け、太田さん、井上さんが規約を作り、12月19日富山赤十字病院会議室にて17名の会員で『人工腎臓友の会』が発足したのです。この時もテレビや新聞が取り上げてくれました。

その後すぐに東京虎の門病院腎友会から全国組織を作ろうと呼びかけられ、どんなものかよく分からず静観していたけれど、昭和46年5月に全国組織が旗揚げしたので富山県も加盟しました。

透析患者に更生医療が適応になった経緯ですが、「人工腎臓友の会」のメンバーが交代で、病棟の入院患者の方々の間を回って書いてもらった署名を持って、市や県へ幾度となく交渉に出かけたのですが、医療は国の管轄なので全国の仲間と共に厚生省に当たるほうが効果があります。



『人工腎臓友の会』発足式に参加した人達

全腎協の初代会長をしていた日大教授の大西さん(日大病院で透析)が、何度も厚生省に交渉のため通っておられました。太田さんたちも、2度東京に行き協力しました。ある時の交渉で、高知出身の塩見という厚生大臣(この方も医師)が透析に関わったことがあって、その時ものすごいお金がかかった、だからこれはどうしても透析患者を助けてやらなくちゃいけない、と大臣の口から出たんだそうです。いっぺんに力が沸いてこれからどう当たるか相談しました。

また、日本医師会が応援してくれ、「透析患者は大変だから何とか補助してやらなくてはならない。透析患者は今に元気になる。もう外来通院も多い。しかし金がかかるから身体障害者の1級にして、その中の更生医療を適応していつてはどうか。」と訴えてくれたのです。その時に念願の更生医療の適用が決まったのです。そして昭和47年10月から更生医療がきくようになって安心して透析できるようになりました。患者のみならずたくさんの方々の支援があって、腎友会設立から2年目のことでした。

## 輸血そして食事療法

次に血液の問題です。透析をするたびに輸血が200cc必要で、当時は献血する人も少なく献血手帳を提出しなければ輸血できない時代で、献血手帳を準備するために親類縁者・知人をお願いする苦労があって献血の必要性を世間に呼びかけたりもしました。

3つ目は食事療法でした。塩分3g、カリウム、カロリー等の節制が大切で自分や家族が計算して適切な食事が出来るように指導を受けました。キール型は面積が少なく効率も悪いため、しかも週2回でしたから貧血にも苦しみ、厳しい食事制限がありました。しかし、月に一人ないし二人は亡くなっていきました。原因は心臓に水が溜まるため、この治療には心臓に針をさして水を抜くのだそうですが2~3回もすると死んでし

まう、結局水分の取りすぎなのです。それとカリウム。朝、元気に出たのに病院に着く途中、車をぶつけて死んでしまった、などということがありました。急にバタッと心臓が止まってしまうのです。

各地から約2～3ヶ月の命と診断された尿毒症患者が透析を希望して殺到しました。県下で透析施設があるのは赤十字病院だけだったので透析開始より6ヶ月で満杯となり夜間透析が始まりました。仕事を持つ人が仕事を終えて夜8時から透析を始め、翌朝8時まで12時間の透析をする、終わるとその足で会社へ出かける、という信じられないような生活が始まりました。患者はいろいろの制限や苦勞を乗り越え、看護婦さんたちや先生方の献身的な努力を得て、毎日必死に頑張った姿が目に見えます。

### 前向きに生きる

そうした中でも生きる喜び、働く喜びがあり励ましあつての透析だったそうです。クリスマスの夜、林先生からビールの差入れがあり、水は飲めないものと思っていたのでみんな驚いたこと、スタッフや先生、家族も一緒に宮崎のたら汁を食べに行ったり高山の鍾乳洞へ行ったり、ボウリング大会をしたりなど、苦しい中にも今は懐かしい思い出になっていることが多い、と皆さんおっしゃっておられます。

こうして精一杯生きた当時の全国の会員の方々と共に体のつらさを押して頑張つて得た医療費を始めとする数々の福祉、医師の方々やスタッフの皆さんのお陰で向上した医療の恩恵を受けている私たちです。ただ「ありがとう」だけでいいものでしょうか。

最近の経済不況でいろいろ政治的にも問題が現れ、福祉の切捨てが始まり医療費の一部自己負担も聞こえています。NPO法人化する今年こそ腎臓病患者全員が一丸となって、先人の努力をつぶされることがないように訴えていこうではありませんか。そのための一歩として腎友会に入会して組織力を高めようではありませんか。